





本清

門遠 13  
號 969  
卷

四十一

字

嵐岐花月奇譚序。

題妹脊山院本行於在久矣舉

一賢擇志攘佞以成編焉觀者無

不擊節嘆賞今春我友鶴山子

營業之暇戲翻案之著花月奇

譚若于卷乞余于校正余素有

小說癖則不顧不才加授之冀

看官以温媪魚魯之謬勿罪子

二花月奇譚卷之一

三



云爾

天保辛丑初春

山月菴京鶴誌



奥村金水書



辛丑歳々  
花相似

歳々

辛々

人々

同

志の如く

あつ

うみらる

山月菴

秋月桂大夫清英



三 室文堂蔵



一  
あつし  
ふはる雄子  
山月庵

獵師 采六

秋月桂太夫息  
同 桂太郎  
清澄



蛇塚典膳

直か  
志けり  
蛇い  
京柳

典膳一子  
鹿之進

三 室文堂蔵





山嵐花月奇譚総目次

卷之一

第一回

紅顔の少年良縁と約は  
妖蛇の怨霊妻子と崇る

話

卷之二

第二回

鰐口忍術宝刀と偷すむ  
茨木奸計主君と反むく

話

卷之三

第三回

善八酩酊呑助と撃る

話



秋月憤怒大西を罵る 話

卷之四

第四回 義士北野と少女と諭れ 話

壯夫舟坂と老狼と砍る

卷之五

第五回 忠直使と奉じて皇都へ還る 話

典膳奸と逞して忠良と逐ふ

卷之六

第六回 勇婦賊と殺して夜東に走る 話

双士勇と振ふて美人と助く 話

卷之七

第七回 櫻娘春と想ふて爵位と患ふ 話

侍女神と禱して瑞占と得る

卷之八

第八回 漚河の扁舟香雪と載せ 話

芳洲の漁客落花と釣る

卷之九

第九回 老母に誠諫櫻子と激し



双胎の奇詔清英を驚む

話

卷之十

第十回

朶六義胆一子と刺れ

話

清澄慈心三吉と極ふ

第十一回

乱臣賊士天誅を伏く

話

忠義節操褒賞を受くる

全帙十巻 通計十一回

花月奇譚總目次畢

嵐峽花月奇譚卷之一

平安 頼川恒成著

第一回

紅顔の少年良縁と約し

話

妖蛇の怨灵妻子を崇る

疇昔室町將軍の時代と名。備前の国密石の城主とく。

宇羅上掃部介則宗といふ人あり。幼より才たまくましく。

頗る文武の道ふ耽り。さう咲く春の日のながくとも。

野山よりそびぬん。只管武術と鍛錬し多し。とむ。

冬は日の寒を小も。机辺とまふまびし。聖賢乃経。



各と涉獵して。読試するふの。寢食とらんを多し。民  
と撫育しむふなる。君子は夙小蒼生も。其徳よ  
きなりて。他の国に今も猶干戈やむとさふけきも。  
静謐と治まりて。大平とを承しりる。これよく足利  
家の御覚も他は呉あり。多くの中より撰むごとく。  
守護織と命せられ。京師に在て九重の宮闕と守護  
しむこと。こよなき家は面目なきべし。ぞが御内乃  
侍。大西庄左工門則春とふも。一人の兒女と持て。  
けり。それら名と桜子とよびて。襖補の内より美麗し

く。肌膚玉のごとく照徹して。往昔の衣通姫貴妃小町  
もゆさむくべく。流唇筆跡となく。父も似て人よま  
ふま。系竹のまぶも縫ふ業は母も似て最妙。一うも  
孝心深りりる。さぬは子の最愛。さへ凡人のた  
ひなき。況て斯世小稀なる。才智技能あるのをさ  
此。容儀も人よまぶま。一人の女兒なりりれば。兩親乃  
ゆつじ。何よれとへんもみもす。速く天癸乃やうふハ  
天晴よき女婿とりて。初孫うませ。花くしく。後の栄へを  
んんものと。小指と屈つて其期と待久しくをおりひらる。



爰小則春が親友小。秋月桂太夫清英とよふものありき。日  
頃親しく行交りしが。桜子が優まやさしく。孝心才智有  
ま愛て躬桂太郎清澄と。年頃も似合しければ。我々の  
煙ののりんと密に商量たり。則春夫婦も桂  
太郎が美少年ふして。伶俐すと。豫てまじく見せし  
つきして。知りけきをを潜に歡び心よく承引て。互ひ  
良縁とさぐめ置猶。その後何くれと言まつけ山  
つけ。訪つ問もつ往來して。最睦とくを交りし。かく  
光陰の過やれきる。白駒の隙ととぐるがごとく。文正二年

と。かりより。こはと。年号改元ありき。應仁とぞ号らる。  
炊年とや桂太良の十八才。とて子に十六才をとりし  
り。生長よまごりて。花の顔をせ。嬌艶と。咲んときさる  
芙蓉のこころ。翠は髪髮杖の肩儼。実と世は稀なる。後く。  
玉樹をよめて子と結び。金鸞卵と出る。似たり。この美  
男子は炊美婦の人の。定良縁とよふべし。と。世よきて  
たやれむりなれ。親の心のとれ。さ。い。を。ひ。と。推。て。  
る。へ。し。と。死。婚。嫁。の。規。式。と。も。行。へ。を。命。と。お。り。ふ。と。り。ふ。  
常言より。月よむ。雲。桜。子。は。花。よ。め。し。故。障。出。来。て。



思ふぬ月日と送るにりる。こよ一ツの故障とらふの管領家  
 細川勝元山名宗全と確執しあひ。国に大名小名各  
 位皇都に馳聚り。或は細川勝元と輔翼或は山名宗  
 全に随従て東西に陣を張る。挑戦さるるが志をりあし。  
 世に大乱となりより。當時宇羅上則宗公は京都の守  
 護織りりるが。官願つらく陣をとりて官願と守衛し  
 たり人々を家老茨木典膳と本國より召上し。守護織  
 やしんと守らせり。此茨木典膳は奸佞より邪智ふ  
 り。相辞て甘く。上は信使ひ人と服従け。阴に釵を

匿して謀万を企て策利をもち。大逆不道の曲者なり。  
 去年文正元年春三月下旬父入道惠光なるを病  
 因て身退り。當下一門血属ともいへも悲しき事ふ思ひ。  
 跡や枕を取携りて嘆きさげんとかいひしやう。かゝるあ  
 づきりたり。舟坂山の左に帆の谷に葬らんと。その  
 準備をせしめり。典膳は通霄亡父のまゝに迎きて。一  
 門の甲乙と。俱にまゐりて居りしが。折ふし門辺に呼  
 て。誰ともしに紅の衣を着る一人の老翁杖をさぐり  
 入来り。典膳が前を跪き承るるを。尊大人御早世成れ



一。愁傷しゅうじやうととと察さつしとべりつとを是これより東ひがしなる。  
 舟坂ふねざかの帆ふは谷やまに葬なぐさらましく思おもひよし。彼か処この老翁らうじゆうが徒類とろり  
 眷属けんじゆく百年ひゃくねん余あまに任まかせたまふべとど。領主りやうしゆの臣おみは出頭しゅつとうなる。  
 入道にゅうだうどの墓はか処ところトたまひんちやなれぬ。奈何いかんよとせんとす  
 べなり。願ねがふへ三日さんじつ後あとあへ老翁らうじゆう羽田はつたは一族いちぞくと將しやうて。拙せつを  
 徒とろしととべりつと。ふよとととと忽たち地ぢよとととととと人ひとに  
 なりぬ。折をりり築地きよぢの河がはをささる大おほの吠声わいせいしりたりなりぬ。  
 打うちおどろきとて典膳てんぜんの夢ゆめ吐つれと中ちゆうとと。眠ね竟ぢやうしつえ  
 ちのせが。父ちちかまなくべなりりれぬ。扱さくこのやとけつりぬりて。

睡ねむるともたぐくまどろみりん。怠おそり心こころとと吟ぎんきつ。側わきなる  
 とり大おほの心切こころせきんとと座ざと立たがとやくと音ねしつ。膝ひざ乃なり  
 上あがよりおつるそのあり。何なんもとととと撈くわ捜さうととと上あがりぬが  
 こいつらふ大おほき中ちゆうなる。蛇へびの脱衣だつぎもとと何なんりりぬが。さしもは猛もう  
 き武士ぶしとへおのひがけなれるるれが。諤げ然ぜんととととととつ。  
 思おもひ其その処ところに投なげす。一足ひとあしあへとと退ひきるとと當下たうげもや並居ならひ  
 一門いちもんの人ひととも。各位かくい眠ねむと催もよほして或あるは手枕てまくらもまなく  
 熟睡じゆくすいとと光景あかりざやなりり。が此物このもの音ねはおどろきととととて。  
 何なん更さらもやと疑問ぎもんは典膳てんぜんの蠟燭ろうそくの心こころよりととと復坐ふくざり堆たい





山名細  
川洛中  
乱を  
跋凡



菱川  
師種画



しるるといふものよと。人こそいふべりれども物ごり  
まぐちなん吾儕が不孝の故なる。不意もまどろと。  
夢中よや一人の老翁。紅の衣を着し。黎れつえは  
携りて。某が前より。家尊の他界のかるしと吊つ。  
慰めつ。ふとといふよと。夢覚り。よと。蠟燭の心截  
らんと立上る膝の上より。さやくと。おるりのあて。うぐい  
とりてよくえれば。この蛇の衣なりと。あやし。ふあ。びや  
と。聞て衆人驚き。て。その最奇怪のふなる。いふも。彼処  
いむ。より。大きなり。蛇の住る。あるより。さける。あり

く樵者柴人の見語り。と。れも。あり。と。と。の。み。察。す。也。夢。り。  
。宣。ふ。朱。衣。の。老。人。の。其。蛇。の。変。化。な。る。ん。所。望。の。ま。く  
。葬。送。と。一。兩。日。延。引。お。ひ。て。彼。が。栖。家。と。う。つ。れ。と。ま。し。ま。く  
。後。小。葬。を。し。べ。し。と。り。て。彼。が。巢。と。犯。し。災。と。ふ。煮。い。で  
。し。の。い。で。異。口。同。音。で。諫。む。ま。り。典。膳。の。冷。や。い。怪。し。と。  
。と。ま。あ。や。し。ま。だ。れ。の。怪。し。と。ま。り。と。い。ふ。し。と。大。聖  
。孔。夫。子。も。怪。力。乱。神。の。語。を。し。某。が。夢。を。の。み。と。り。と。  
。女。い。し。と。ま。り。と。い。ふ。と。と。さ。と。嘲。弄。の。ふ。んと。お。の。い。ま。り。  
。と。淡。し。と。却。し。言。ひ。な。ま。り。と。人。の。こ。と。と。ま。り。と。ま。り。と。



土も木も我大君の国されが。普天の下卒士の濱。何国の  
鬼神虎狼竜蛇の巢穴と。まらん父入道の當郡乃  
主宇羅上どの老臣され領内はすむをれして。其  
底よぬいふく命よむむくをれい。其遺言よ  
かいて彼処は骸と藏らん。何とぞ彼ホよりつひ  
其期と延引べらんや。よも毒蛇の祟となんとも。弓矢刺  
ひ身とりらる。何の畏懼するあらん。人のさあが恥  
一。再言のいごと。窘らまて人々の快くはあらんとも。  
一度口よりいひて。さうびくさぬ日頃れ氣質よく知

き強てもとらる。くく其夜も明けも早朝より奴隷ホ  
ハ手よ釜とぶさへ。帆此谷は立つていて。洞さ四五尺を  
くりぬ。一ツの穴を掘りぬ。其中は赤蛇あり其長一丈  
むりり。それ外小蛇千余尾あり長舌とひくめり。東  
東西とまひまひま。奴僕ホはおどろき懼く。頭てやへ  
立くへ。その由を告るふちん衆人の顔色とらへ。舌を  
つす。夕アは夢よえ。老翁は蛇よて何り。舌を  
まきてを叫ぶ。典膳は蛇ともさうぐれ一尾ものさう  
焼とてよと。下知よ。さうぐれ奴僕ホは乾燥る茶を



くもて火ともふち焚火すてける。煙れ中より一團の鬼火  
片とゆゝいま出茨木の中の方へとび往らるゝと  
怪しけれ。其日も昼すまで未さぐりとわらりれを  
菩提院の僧より。経と誦し喝とぶげく。送葬乃規  
式とい遺もふく行ひり。妙夜よりして毎夜くこみ  
朱衣の老人よりして。枕上よ立そひて。云くもく置つる  
もくもくもく住めれ。巳の巢穴と掘りくして九族  
とく焼すてける恨つて。茨木典膳おのいさへせ  
くきんご。つよと覚へく目とさぬせ。或夜、妻乃楓

女。大熱、胸乱舌をなま。煩悶苦痛、或夜、息玉息女を  
代る。大熱、此病よりけく苦くもあふ。臥床、近知を匍  
匍。先の日蛇とやれ。蛇等のく。光景、彷彿  
佛より。典膳、其容躰、屈たぐりて堪りて。尊と  
僧も経よませ。或、修験者よ護た焼せ。或、何某、神  
いのり。或、くれく。佛の願を心れく。とつてせ。一点  
まじり、験もなす。日と歴る。ふ十一才と。八才よふま  
二人の女兒、遂小空く。かてり妻も長男を  
も取ころされん。口惜く。これのひとへ。彼蛇の。残念乃



かひ所為あつん悔しき事をしてるりと後悔織悔  
やるくなく。殆困りたるをとりふる。時一馬の旅店よ。  
都がより下りしとて一人の旅僧逗留せり。人と相  
して吉凶を弁じ。過去未来の因果を説く。堂とてん  
がごとく。うく経を誦し死とさづけて。其禍災を禳ひのぞ  
く。甬まども一銭半銭も人の施物と清納めぬ。綴れし  
法衣と身もちかひても。さうに耻るけしともあふ。只管  
人民の厄難とさくふと己が任とせり。それが市中で取  
囉して。弘法大師の化身なりんと最喋りく罵言と

合て三里五里とへいどて。遠き里の人とて人老と推乃え  
幼と率ひて来りて教化とせしむるも此門前より市とるを  
了。典膳是とてくも。とて第へ清待して。我家の因  
果と問ふ。旅僧の手ふりけし。珠數憂くと押揉んぞ。  
はよ覚悟のゆや。今年にまほゆるりと。數多れこの  
此命とて焼ころされしり。其執念の實縁と。此  
災となりみこり。とてよ二人の此病と。死とてと覚る  
り。禳ふ術れり。とてよいあつねど。今それとてもさし除  
う。天機とての恐あり。さといとて此き打とるを。いつ



愈よべうもしれざるのまゝもふ命いのちとどろくべし。止やりて  
最尊さいそんき名な劍けんと賤せんひ得えて護身ごしん刀とうとせば魑魅ちみ魍魎りやうりやう。  
是これも恐おそまて自然じぜんとやむるあるべし。爾なんもいひて  
求もとんとせむ。又また其その劍けんのふつとて。後のちは一ひとツれこまごころひ  
出来でき人ひと是これもま蛇へびの部ぶ崇たかまり。より心こころはつとて。方とう  
事こと自身みづかが心こころはつとて。小こまくくひあふるやうに。噫あや気きれど  
まろくやうりと。ま典膳てんぜんの覚さある。彼かの妖蛇ようじやうの所ところ為なる  
り。其その夜よよりし。田いんひが。汎凍はんとうしことばと。用もちひけし。  
此この災わざの緒いとと惹ひいて。しるる。浅猿せんえんしや。耻はくハしやと。百千ひやくち

度悔たぐいまど何なんのういもちく。手てと又またとて詞ことばあり。此この向むかし  
彼かの旅僧りよそうの告別こくべつでくらんとする。袂たもとと荒引あらいひをぬ。昼飯ひるげと  
すの一封いっふうの布施せ献けんらんとする。まどく。固辞こごくうけ  
敢あん。典膳てんぜんしひて進すすめし。旅僧りよそうのうらなを立たて。吾われ侪たがひ  
いこれらに法術ほうじゆつとく。施物せぶつとむさわり。榮利えいりとなる。  
今いまは世よに盜僧たうそうの類たぐひあり。ひろく諸国しよこくと行脚ぎんかくし。  
人民じんみんの厄難やくなんと穢たひひのまをて。其その患うれひとまくりんとあふの。  
おど金銭きんせんと受うべらんや。人ひとんまのまと言ことねり。此この家いえの  
まをすのま。い除のぞきをま。せとれど。天あまの災わざひとま。



さぐべし。自身もせむ災いさるべしと。聖人も言ひ。是は  
我ありしと醸し。火まれば。のどさうさうり。今ハ此家  
用るけまはるや退るなりさうさうと。立出ると制手とめ  
る其名と処とさうさうふ。彼旅僧莞尔とさう。我ら  
名もさうと世すて人。三界無蒼の身ましあれば。天地乃  
間とくりし宿一夜とありし逆旅とて。日月の遇客とど  
の小諸国と遍歴し。何国を宿とさうさうと。袖  
とさうのさうさうさうさう。跡まの一人茨木典膳いりあしと  
名叙とめさうと妻子の奇病乃苦しとさうさうのりのと

思ひて心とさうさうさうさう。近頃茨木典膳が家。一人  
の食客逗留せり。其名と鰐口林三とよび。忍術の妙を  
得たり典膳是と奥あり。一室の裡ふまひとよせ。豫  
足下もさうさう通に見えさうさう。妻子の奇病神とねがひ  
仏ののり。心れさうさうと場せ。一毫其ま。さうさうのさう。  
己よ二人の死るりさうさう。うさうのさう。二人の者も。とも小鬼  
薄まやさん。最安く思ひとさうさう。さう。彼市中  
噂さる。旅僧と召さうさう。禳いせん。とさうさう。此災は  
のどさうさう。止まらさう。世は稀さう。名叙と守とせげ。







自然やむるありんとつく。それより足下を勞し。この  
子細あり。つら小美引きんやと。つら林三莞尔と  
斯役介なる人。何変もゆき身は叶ふるはあつが  
御用立。些々御恩を報。徳まはをへるふ  
心々諾ひられが典膳大いふよろこび。頼子細の  
鰐口大人其辞をきく。何とゆれへん。問はると。呼  
よせ耳は口よりき。このむ子細の余は羨しあはれ。其  
つら思ひ惟ふ。今名刀とゆらあんと。國中隈  
むく搜索ども。原来田舎のむおれが庸尋うるとのひ

が。然まが都へ人々をせ。買せんとおれども。都會  
此人の癖と。何れもゆれのてて買。数多めこがゆを  
貪ると人夫も厭ふ。このども。近世世間は偽物多く  
正物の最稀なり。数多め金と費して。贖ひ得ても其劔。若  
正物よりざる。このら。何の益も。只今強て是  
ゆり。後日のことさ。出来らん。必ひるを争う。と。仙  
僧も誠しめ。おれられども。延引せば妻子の。そ。ん。ふ  
のび。其上。冥途の人となり。ゆせん。かくて。た。と。ん  
いく。ど。れ。福。あり。ても。六日。昔。蒲。十日。昔。菊。より。猶。う。い



あ。一日もや中、賤し得て。妻子は苦痛をまうひし。後  
日はまじひつらも。今日けうさめふくぐり。よろき足  
下とものむさう。城主宇羅上則宗公。一口の名劔を代  
傳へ持多り。御先祖赤松則祐公竹生。鳶の弁天と  
し。も信仰あし多し。時々叅詣し多し。其頃言  
領北条高時。我意は募りて。国政をのりむさう。上を  
凌ぎ民を傷ふ。悪逆不道の虐政と。天人とも不嘖。も  
齒を切りむ。とるふ。忍びん。夫とて。征せん。とて。出陣の時  
も。彼処は。皆で多し。拜殿は。階にて。終夜彼奸賊と。輒

退治を止めあへ。祈願とて。思ふ。やとら。まふ。並。乃  
中。神童現出あり。其名劔とて。けり。ぬ。其後。数度。乃  
戰場と。経る。屢軍功を。現し多し。全く。此名劔。威徳よ  
り。て。の。る。ふ。り。と。ぞ。中心は。飛龍。れ。と。ぞ。あり。元來。巧。ま。ま  
彫。し。は。あ。し。ひ。ま。と。鑄。ふ。し。と。ら。と。れ。る。も。あ。し。ひ。の。定。は。夫。と。ら  
分。が。と。れ。れ。ども。臆。よ。し。と。れ。り。鏑。も。目。貫。も。赤。銅。も。ぞ。幡  
竜。の。形。なり。よ。ま。と。竜。丸。と。号。ら。れ。り。刀。室。も。同。し。赤。銅  
の。銃。輪。ニ。ツ。三。ツ。入。り。常。よ。り。と。と。秘。め。多。し。と。毎。年。六。月  
虫。干。れ。と。ま。よ。り。必。し。と。と。と。拜。見。し。と。度。あり。此。名。劔



と拝借して家にお返しとありさう。此のさういひは消散せん  
鏡のけを明白之夫を拝借するもうさるあねど。近來  
殿と由國に在り都は在番し多へい急に拝借するも  
言がさるるが。わがふは足下城中へいび入るの  
名劔と偷るを得しぬんや。と密語りぬが林三つ。ついで  
とて頭とくさるで夫の尋常のさるる。いふさる  
さるれども。不肖なる小人とさる人か。思しやうと名一大  
ると明し多ふ有がじ。其名刀を二方の病着平愈し  
あり。何の歡びうこれよとん。報恩のさる其名刀いりあり

やれとてさるせん。豫てとて上つごころ。元某の尼子乃  
卒人先祖より忍術の一卷を秘持す。國を退其時。緯  
倉卒に起し。各物の勿論纏要とさる持に退ゆ。幼  
よりよ。試粗了解てゆへ。此術をりて偷ん。何条のさ  
るふありん。脚心安く思しやせと。誇負は回應られが典膳  
益よろこびて。城中は案内と。叮嚀は説諭ゆれば林三つ  
とて。其準備とていさる。早竟鯨口城中へのび入  
る。何更とくれ。下回は説とるさる

花月奇譚卷之一終



